北近畿における弥生時代後期前半期の土器とその時間列

高野陽子

1．はじめに

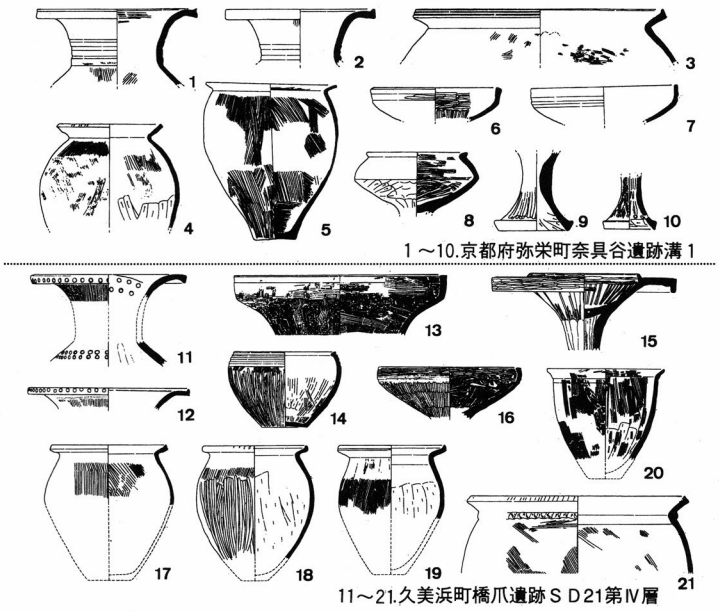
弥生時代後期前半期の土器認識は、昨今の土器の編年研究の進展により、地域間や研究者間相互の認識に大きな相違が生じている。この点について、1977年に畿内第Ⅴ様式[注1]の細分案を示した森岡秀人氏は、後期前葉の土器認識の変化と研究者間の認識の相違を概略的にまとめ[注2]、近畿地方全体における時期小区分の再編成の必要性を述べている。後期前半期の土器群については、これまでにも、前葉の土器群が組成や形式だけでなく、製作手法、胎土や焼成・色調等を含めて後続の土器群と明確に区分されるべき内容をもっているとされ、従来の畿内第Ⅴ様式を第Ⅴ様式と第Ⅵ様式に大別する藤田三郎・松本洋明氏による大和の土器編年が出されている[注3]。その後、近似した様相は河内[注4]でも指摘され、後期前半期の土器群についての認識は、様式的な理解をめぐっても、混沌とした様相を示している。

北近畿では、筆者も先に丹後地域の弥生後期の土器群を検討し、後期前葉から中葉への土器群の変化は、大和で指摘された変化と同様の傾向がみられることを指摘したが[注5]、この地域の後期土器の特色とされてきた擬凹線文の問題などが未整理であり、大別様式を適用するまでにはいたっていない。後期前葉～中葉の土器認識に混乱がみられるなか、北近畿の後期土器研究の当面の課題は、その特色とされてきた擬凹線文の出現経緯や、その前後の土器様相を段階的に明らかにすることであろう。擬凹線文系土器の展開については、すでに稿を起こしているので[注6]、小稿ではさらに高坏の型式学的検討を行い、後期前半期の時間列の構築を試みることにしたい。

2．後期初頭前後の土器様相

本節では、後期初頭前後の土器群の認識を、研究史をふまえて明らかにしておきたい。

中期後葉～末葉の土器群については、『様式と編年』の石井清司氏による土器編年において[注7]、第Ⅲ様式後半に出現した凹線文の多様化をもって、第Ⅳ様式とする位置づけがなされて以降、舞鶴市志高遺跡の報告において、肥後弘幸氏[注8]が第Ⅳ様式を二期に分ける細分案を示し、さらに由良川下流域の資料を検討した田代弘氏[注9]により、凹線文の出現期を第Ⅳ様式



第１図　中期後葉～末葉

としたうえで、これを三小期に区分する細分案が出された。田代氏は、Ⅳ－３小様式の特色を、「凹線文の衰退と壺の無文化、高坏の多様化」としておりでも、この認識をほぼ追認しておきたい。丹後の後期後葉～末の一括資料としては、壺形土器頸部の凹線文Ｂ種に退化傾向がみられ、小形の高坏が含まれる京都府弥栄町奈具谷遺跡の溝１出土資料(注10)(第１図１～10)や、中部瀬戸内系土器群の影響を受け、跳ね上げ口縁をなし、さらに小形化傾向を強めた一群の甕を含む久美浜町橋爪遺跡ＳＤ21第Ⅳ層(注11)(第１図11～21)の資料群があげられよう。これらの甕は、体部最大径が中位上半にあり、小形化傾向がみられる点でより新しい様相を示すが、調整法は内面ヘラケズリの施文範囲が体部中位あるいは中位上半にとどまることに加えて、基本的にはタテ方向のヘラケズリのみで仕上げられる点が特色である。

一方、後期の土器群の特色は、従来から指摘されているように、凹線文が衰退し、小形化・粗雑化・無文化の傾向が強まるとともに、高坏や広口壺に新たな形式がみられることや、跳ね上げ口縁の中部瀬戸内系甕にかわって、凹線文Ａ種を特色とする中部瀬戸内系甕の盛行が指標となる。後期最古相を示す土器群としては、後述する高坏Ａ類の系統の発祥源となる高坏を含む京都府大宮町左坂18号墓第２主体部の一括資料(第５図資料１)を呈示しておきたい(注12)。共伴する甕は、中期後葉から系譜的に認められるやや長胴の、口縁部が単純に外反する甕だが、体部最大径が肩部とやや高い位置に移行していることや、内面ヘラケズリが頸部にまでおよぶことに加えて(注13)、内面上半にヨコ方向のヘラケズリを施す点に新しい要素を認める。

後期前葉の土器群は墳墓出土資料に偏っており、様式構造を概観できるだけの資料数に恵まれた一括資料を欠くが、その一部を兵庫県豊岡市東山墳墓群の出土土器などから伺うと、甕の形式では中期後葉にみられた単純に外反する口縁の在地系甕が激減し、口縁部に

凹線文Ａ種を施す中部瀬戸内系甕が顕在化する。東山墳墓群では、この系統の甕が出土甕全体の組成の約６割を占め、京都府大宮町三坂神社墳墓群などでも約２割を占める。東山墳墓群では、甕の大半が体部下半をヘラミガキするものを基調としており、後期前葉（後期Ｉ期）[注14]のなかでも古い様相を示す。一方、高坏は坏部と脚部の分割成形技法による成形が行われ、脚形態が「ハ」の字状に屈曲して開くタイプが基本となる。

以上のように、北近畿の後期前葉の土器群は、中期後葉以来、客体的にみられた中部瀬戸内地域の影響の強い土器群が、さらに顕在化することを特色とする。

３．後期前半期における高坏の形式と時間列

土器群の時間列[注15]を検討するために小稿で行う分析の方法は、一つの遺物の系統を重視し、変化の方向性を見いだし、そこから時間的な推移を読みとろうとする型式学的方法を重視するものである。

まず、時間軸の検討の中心となる高坏の形式[注16]を明らかにしておく。ここで提示する分類は、系統と組列の検討を経たものである。北近畿の特に丹後・北但馬に分布する後期前半期の高坏について、坏部と脚部の形態から形式分類を行うと、以下のようにＡ～Ｆまでの６形式をあげることができる（第２図参照）。

Ａ類－坏部は深い鉢状で、口縁部がやや内湾気味に上方に立ち上がり、底部外面に稜をなす。脚部は、裾部が「ハ」の字状に開く。

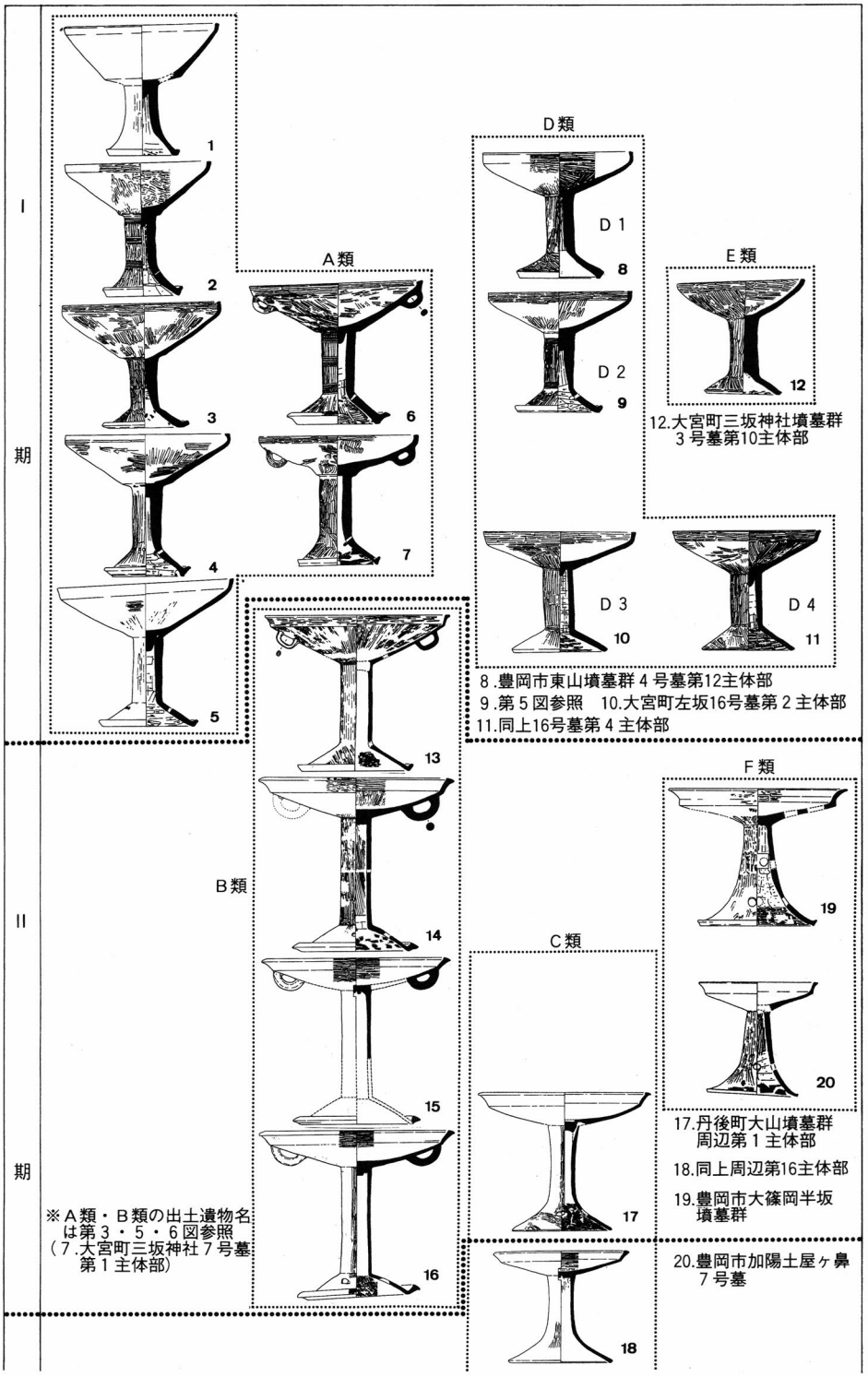
Ｂ類－坏部は浅い皿状で、口縁部が外反し、口縁部端部に面をなし、外方に拡張する。脚部は長脚の棒柱状をなし、裾部が屈曲して大きく「ハ」の字状に開き、端部に返しをもつ。坏部に一対の半環状把手を付すのを通例とする。

Ｃ類－坏部はＢ類とほぼ同形態をとる。脚部は長脚で、柱状をなすが、裾部で大きくやや内湾気味に緩やかに開く。坏部の半環状把手は付さないものが通例である。

Ｄ類－坏部は浅い椀状を呈し、口縁部は、やや内湾気味に立ち上がる。脚部は「ハ」の字に開く柱状の脚をなす。Ｄ類については、脚部の成形手法の違いによって、さらに４類に分けられる。すなわち脚端部が下方に肥厚するもの（Ｄ１類）、脚端部が上方に拡張し、返しを持つもの（Ｄ２類）、エンタシス状の柱状脚をなし、脚端部を単純におさめるもの（Ｄ３類）である。またＤ３類は、口縁部形態に注目すると、口縁部が屈曲して外反するものを指摘できるが、いずれも出現比率は小さい。

Ｅ類－坏部は浅い椀状を呈し、脚部は柱状の脚部の裾が屈曲して「ハ」の字状に開く。

Ｆ類－坏部は皿状を呈し、口縁部が外反する。脚部は脚上半部から下外方に緩やかに外板気味に広がり、脚端部にかえしをなすものを通例とする。


I
期
II
期
A類
B類
C類
D類
E類
F類
D 1
D 2
D 3
D 4
12.大宮町三坂神社墳墓群
3号墓第10主体部
8.豊岡市東山墳墓群４号墓第12主体部
9.第５図参照　10.大宮町左坂16号墓第２主体部
11.同上16号墓第４主体部
17.丹後町大山墳墓群
周辺第１主体部
18.同上周辺第16主体部
19.豊岡市大篠岡半坂
墳墓群
20.豊岡市加陽土屋ヶ鼻
７号墓
※Ａ類・Ｂ類の出土遺物名
は第３・５・６図参照
（７.大宮町三坂神社７号墓
第１主体部）

第２図　高坏の時間列

以上にあげた高坏の諸形式のうち、後期前半期の時間列を検討するため、主要な形式である高坏A類と高坏B類の時間列を検討する。各形式の型式的な属性変化の方向性を見出し、その変遷に時間性が存在することを前提として、時間列を呈示する。こうした方法は、資料総数が限られ、セリエーション(属性の出現頻度)分析などの統計学的な処理が未処理の段階では、主観的な型式の固定化を図るよりも有効であろう。

まず、A類の属性変化とその方向性は、以下にあげた①～③である。

①坏部と柱状部との間の受け部が明瞭なものから、退化し、消滅するものへ

②坏部が深いものから、浅く口径が拡大するものへ

③脚裾部が短く、ゆるやかに広がるものから、明瞭な傾斜変換点をなし、屈曲して「ハ」の字状に大きく開くものへ

また同様に、B類の時間列の根拠とした属性変化の方向性は、以下の①～⑤である。

①坏部が深いものから浅いものへ

②脚部の柱状部が短いものから、長いものへ

③坏部底部内面のヘラミガキを縦方向から横方向に施すものへ

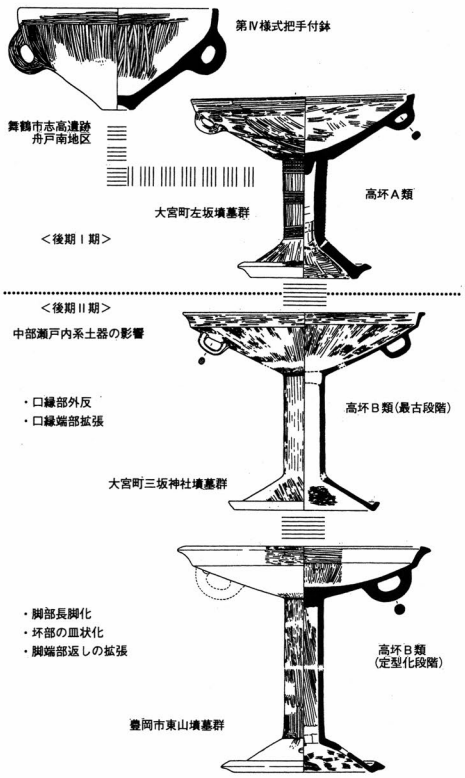
④半環状把手の形態が、「コ」の字状ないし深い円弧状のものから、浅い円弧状のものへ

⑤脚裾部径と、裾端部の返しの端面拡張

拙稿では、A類の出現をもって、後期前葉(後期Ⅰ期)のメルクマールとしさらに、またB類を、後期中葉(後期Ⅱ期)の高坏の特徴的な形式とした。現在までのところ、A・B類をともに含む一括資料は認められないため、それぞれの組列の時間的関係は、厳密には確認できない。しかしながら、次節で述べるとおり、B類はA類に系譜がもとめられることや、A類の最も新しい形態の高坏とB類の最古形態の高坏の脚部の形状が近似すること、共伴する甕の形態的特徴などから、B類の時間列は、A類と一部重なるかあるいはA類の時間列以降と考えられる。二つの高坏の時間列を基準に、後期前半期の高坏の時間列を第2図に示した。高坏C～F類は、型式変化の方向性をうかがうだけの資料点数が得られないので、共伴するA・B類の型式的特徴により、おおよその位置を定めている。なお、ここにあげた変化の方向性はあくまで作業仮説であり、この正否は、本来共伴資料から型式変化あるいは属性変化の一定の方向性が存在することが追検証されねばならない。こうした観点から、同時に一括資料の時間列の呈示が必要であり、この点については5節で後述することにしたい。

4．各形式の系譜と製作手法

前節では、複数の属性変化の方向性から導いた高坏の時間列を示したが、これをもとに、



第３図　高坏Ｂ類の系譜

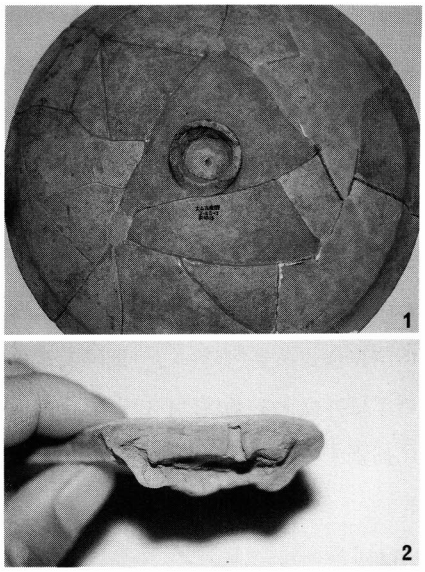
ここでは後期前半期の高坏の各形式の系譜について明らかにしておきたい。

後期前半期の高坏のメルクマールとなるＡ類は、坏部と脚部が別々に成形されるいわゆる分割成形技法が導入されており、製作技法上にも新しい要素が認められる。Ａ類の系譜を考えるうえで、端部に返しをなす柱状脚の形態は、「畿内」やその西方地域の影響を認めるものであるが、坏部形態は周辺地域でもほとんど確認されないタイプで[注17]、後期初頭に北近畿で生成した独自性の高い形式と考えられる。その出自については、古式のものほど坏部が深く、坏部基底部外面に受部の名残りが明瞭にみられることから、本来は鉢の形態を模したものであろう。例として、舞鶴市志高遺跡出土例[注18]（第３図）など第Ⅳ様式以来の鉢の形態をあげておきたい。Ａ類のなかから、坏部に一対の半環状把手を付すものが派生的に出現することについても、こうした鉢の半環状把手に系統性を求めることができよう。また、把手付鉢は木器の類例が大阪府和泉市池上遺跡[注19]などにもあり、高坏と同様、木器との関係性が高い器種であることから、前述した志高遺跡の把手付鉢なども木器を模倣している可能性がある。

後期中葉（後期Ⅱ期）を特色づける高坏Ｂ類は、薄い器壁をなし、細く丁寧なヘラミガキを施し、精良な胎土を用いた精製品である。この系譜に関しては、拙稿において述べたとおり[注20]、先行形式である半環状把手を付すＡ類を母体とし、中部瀬戸内地域の土器の影響下に形態変化を遂げたものとみられる。Ｂ類の坏部の特徴は、口縁部が外反し、その端面が拡張することだが、後期前半にこうした特徴をもつ高坏が盛行する地域は中部瀬戸内地域であり、加古川を遡上するルートを介して、その影響を受けた可能性が考えられる。特に兵庫県豊岡市の東山墳墓群[注21]には、外反する口縁部の端面に櫛描文を施す、後期前半の鬼川市Ⅰ式の影響のみられる高坏が出土しており、北近畿と中部瀬戸内地域との交流の一端をみることができる。

高坏Ｂ類は、製作技術上にも大きな特色がみられる。それは脚内壁最奥部に残された径

3～5㎜、深さ5～7㎜前後の刺突痕(第4図)に関連するものである。この刺突痕は、内面ヘラケズリを施さない個体にもみられ、少なくともヘラケズリに関連する工具ではない。刺突痕がどのような過程で生じるのか、この点については2つの可能性がある。一つは成形の最終段階において、坏部中央に円盤を充填する際、脚柱部内側から接着のための支持具として棒状の工具を用いたとする見方である。もう一つは長脚化に伴って刺突痕が出現することを重視し、脚部成形段階に用いられた絞り工具の痕跡とする見方である。脚部の絞りは、長脚化にしたがって難しくなるため、絞り工程の際に軸芯を使用した可能性がある(注22)。軸芯については、他地域でも、後期の柱状脚をなす高坏の脚内壁最奥部に竹管状の圧痕を認めることがあり(注23)、その使用が想定される例がある。刺突痕は、B類から派生的に生成した長脚の高坏C類にも確認されることから、この技法は後期中葉前半に出現し、後期中葉から後葉にかけて盛行したものとみられる。刺突痕を伴う成形技法は、当初、北陸に一部伝播(注24)し、日本海側の地域に広がりをみせるが、北近畿では後期末に終息に向かう。しかしながら、山陰系の高坏には、むしろ弥生時代終末期から同種の刺突痕がみられることが指摘されており(注25)、北近畿で盛行した手法が日本海側に広がるなかで系譜的に受け継がれた可能性が高い。



第4図　高坏の刺突痕

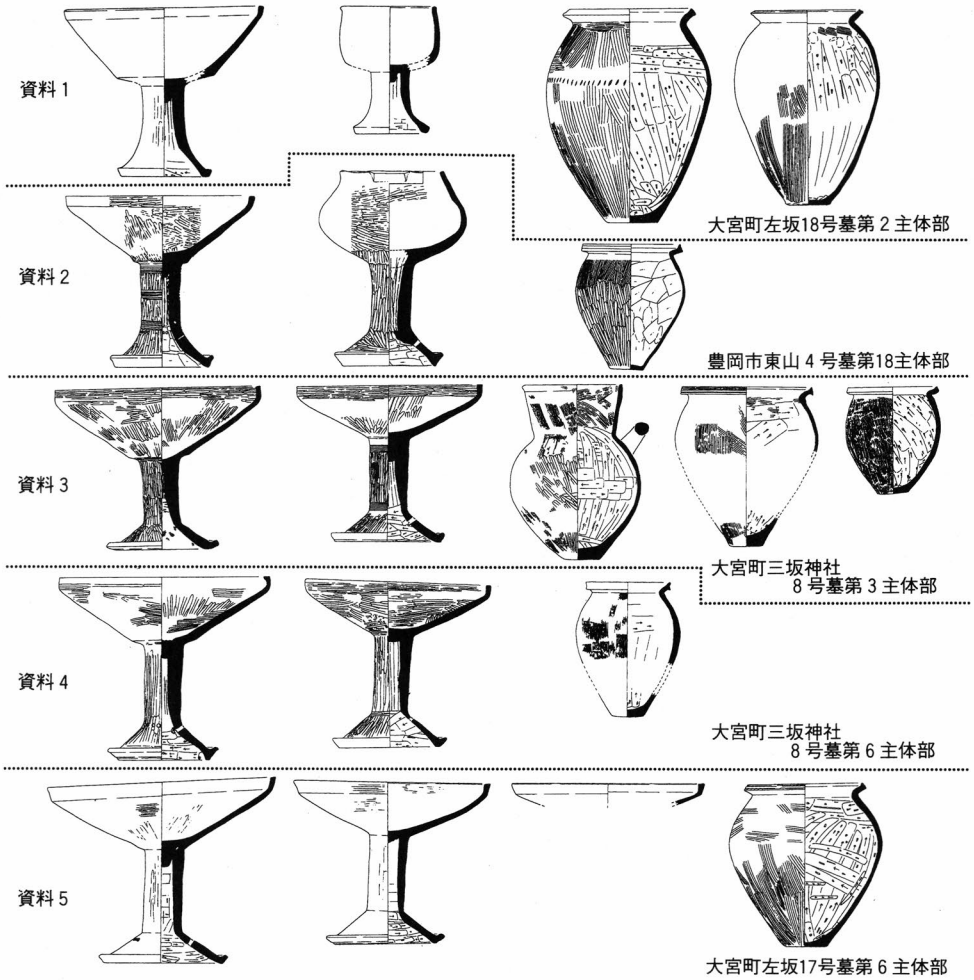
椀状の坏部をなすD類は、脚部あるいは裾部の形態がそれぞれ異なるため、さらに形式分類を行い、3類を示した。それぞれ出現頻度が小さく、組列を明らかにするには至らないが、C類の基本的属性である「ハ」の字状の脚部や、D1類における脚裾端部の下方への肥厚、D3類におけるエンタシス状の柱状脚は、第Ⅳ様式以来、引き続き「畿内」との関係性がうかがえる形態である。D3類については、口縁部が外反する特徴を示すものは、Ⅰ期からⅡ期への変換期の所産とみておきたい。またD2類における裾端部の返しは、この属性が脚柱部の櫛描文との出現率が高いことからみて、中部瀬戸内地方ないしはこれを介する播磨・摂津などの近畿地方西部との関係性が高いと考えられるものである。

F類は北近畿の中でも但馬周辺に散見されるもので、やはり近畿地方西部の影響を加古川ルートを介して受けたものと考えておきたい。

５．後期前半期の時間列

先に明らかにした高坏Ａ・Ｂ類の時間列をもとに、これらを含む一括資料の時間列を第５図に提示した。前述したように、Ａ類とＢ類は、共伴する確実な資料がみられず、資料５と資料６との間の時間的関係はやや流動的である。しかしながら両段階の高坏の脚部形態が近似することや、Ｂ類の古相である資料６・７段階は典型的な擬凹線文有段口縁甕が共伴しないことから、大きなものではないだろう。

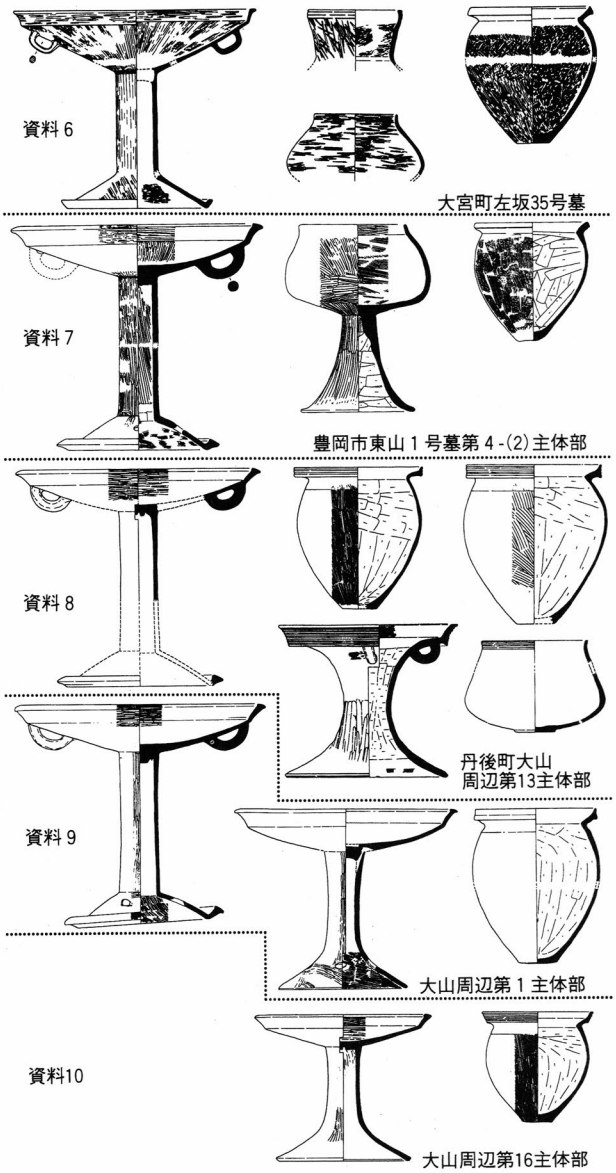
一括資料における甕の形式を順にみてゆくと、器高が大きく、体部下半の長胴傾向の強い第Ⅳ様式系甕（資料１）→凹線文を施す中部瀬戸内系甕（資料２・３・４）→口縁部が「く」の字に外反する甕（資料３・７）→口縁部が直立する擬凹線文系甕（資料８）→口縁部が斜めに拡張する擬凹線文系甕（資料10）へと、段階的に推移しており、前述した時間列の方向性



第５図　高坏Ａの時間列

がおおむねね追認されてよいものといえるだろう。

拙稿では、後期前半期は、高坏Aを特徴とする後期Ⅰ期(資料1～5に相当)、高坏Bを特徴とする後期Ⅱ期(資料6～9に相当)に2期区分した。後期Ⅰ期には、肥厚する口縁部に凹線文A種[注26]を施す中部瀬戸内系の甕が盛行[注27]するが、口縁部が単純に外反し端面がやや肥厚する甕も一定比率を占めている。後期Ⅱ期の古段階(資料6・7)では、中部瀬戸内系甕の減少と対象的に、単純に外反する口縁をなす甕が顕在化し、主体的にみられる段階があるようである。口縁部が拡張するタイプの擬凹線文有段口縁の甕は、資料8において認められるが、器台などにも発達した擬凹線文がみられることから、この段階に擬凹線文の技法が確立したといえる。資料9に擬凹線文有段口縁甕を含まないが、これは単に組列を示すことができる高坏を共伴する資料がなかったからにすぎない。資料8と資料10の甕の口縁部形態と比較すると型式的なヒアタスがあることを見ても明らかなとおり、資料9段階は擬凹線文有段口縁甕の盛行期である。



第6図　高坏Bと一括資料の時間列

以上の時間列の検討から、後期前半期の時期区分の可能性を探ることにしたい。後期前半期は、高坏A類や凹線文を施す中部瀬戸内系甕が組成の中心となる時期と、高坏B類および擬凹線文を施す在地系甕が主体となる時期に大きく二分することができる。この2期は、拙稿において示した後期Ⅰ期・後期Ⅱ期にそれぞれ該当する。まず後期Ⅰ期は、高坏

Ａ類の組列を中心にみると、Ａ類の発祥源形態となる高坏を含み、中期以来の甕の形態を色濃く残す資料１段階(最古段階)、坏部に鉢状の形態を強く残す高坏Ａ類を特徴とし、内傾する口縁部の立ち上がりが大きく、胴部下半にヘラミガキを多用する中部瀬戸内系甕を主体とする資料２・３段階(古段階)、長脚化・調整の粗雑化が著しく、坏部外面の稜線が消滅するものを含む高坏Ａ類や、エンタシス状の脚柱部に裾部が「ハ」の字状に開く高坏Ｄ３・Ｄ４類を主体とし、口縁部の凹線文が退化傾向をみせ、胴部下半をハケ調整する中部瀬戸内系甕が主体となる資料４・５段階(新段階)に細別できる。

また後期Ⅱ期は、坏部が深く、坏部内面の縦方向のヘラミガキや深い円弧を描く半環状把手を特徴とする高坏Ｂ類を主体とする資料６・７段階(最古段階・古段階[注28])、浅い坏部に、浅い円弧の半環状把手を付し、長脚化が著しい高坏Ｂ類を特徴とし、擬凹線文の施文手法が確立した擬凹線文有段口縁甕を共伴する資料８・９段階(新段階)に細別できる。一括資料ではないが、資料８段階に先行して口縁部拡張の未発達な甕で、多条化する擬凹線文を施すものが一部にあることから、擬凹線文有段口縁甕の出現は古段階にみておきたい。

近畿地方北部の弥生時代後期土器の編年案は、すでに全体を４期区分した私案を呈示している[注29]。拙稿でも明らかにしたとおり、後期の最大の画期は後期Ⅰ期とⅡ期の間にあり、中部瀬戸内系土器及び「畿内」系土器の影響の強い後期Ⅰ期と、擬凹線文系土器群の発達期である後期Ⅱ～Ⅳ期に様式的に大別することが可能である。小稿は、このうち前半期の後Ⅰ・Ⅱ期の細分の可能性を具体的に検討したものである。今回の検討によって、後期Ⅰ(後期前葉)、後期Ⅱ(後期中葉)、後期Ⅲ・Ⅳ(後期後葉～末)のなかでも、前半期とした後期Ⅰ～Ⅱ期の時期区分は、都合、２期６段階の小期区分が可能であることを示した。既述したとおり、後期Ⅰ期は、Ⅰ期中段階の高坏Ａ類に近似した形態を持つものが、破片資料ではあるが、河内地域の後期初頭の標識的な土器群とされる巨摩・瓜生堂遺跡沼状遺構のなかにみられる。また、同じくⅠ期中段階の豊岡市東山墳墓群出土の資料のなかに、上東・鬼川市Ⅰ式の影響が窺える高坏が含まれることから、併行関係の一点が確認され、後期前葉の土器認識にこうした地域と大きな時期差を認める必要はないだろう。一方、後Ⅱ期には、大山墳墓群に河内地域からの搬入品の広口壺があり、西ノ辻Ⅰ式との接点が確認できる。

小稿では、後期前半期の時期区分の可能性を、高坏の形式と型式組列の検討から導き、さらに中部瀬戸内系土器から擬凹線文を施す在地系土器への変化がこれとほぼ連動し、時期区分のうえで、重要な画期となることを明らかにした。この画期は、大別様式としての把握を可能にするものであり、今後、さらに後期末～古墳時代初頭の在地系土器様式の変質過程を明らかにしたうえで、後期土器の編年を再検討したいと考えている。

(たかの・ようこ＝当センター調査第２課調査第３係調査員)

注１　森岡秀人「畿内第Ｖ様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」(『河内長野大師山』関西大学文学部考古学研究室・河内長野市教育委員会)　1977

注２　森岡秀人「弥生集落研究の新動向(Ⅲ)－小特集「淀川流域における集落の様相」に寄せて－」(『みずほ』第32号　大和弥生文化の会)　2000

注３　藤田三郎・松本洋明「大和地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社)　1989

注４　三好孝一「河内地域の中期末葉から後期初頭の土器」(『みずほ』第26号　大和弥生文化の会)　1998

注５　高野陽子「弥生大形墳丘墓出現前夜の土器様相」(『季刊考古学』別冊第10号　雄山閣出版)　2000

注６　ａ．野島永・野々口陽子(高野陽子)「近畿地方北部における古墳出現期の墳墓(１)・(２)」(『京都府埋蔵文化財情報』第74・76号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1999・2000

ｂ．高野陽子「擬凹線文について」(『庄内式土器研究』XXⅡ　庄内式土器研究会)　2000

注７　石井清司「丹波地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社)　1989

注８　肥後弘幸「弥生土器の編年」(『志高遺跡』京都府遺跡調査報告書第12集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　198

注９　田代弘「由良川中下流域の第Ⅲ様式土器について　前・後編」(『京都府埋蔵文化財情報』第51号・第53号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994

注10　柴暁彦「奈具谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第76冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1997

注11　石井清司・黒田恭正「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』　京都府教育委員会)　1981

注12　竹原一彦「左坂墳墓群」(『京都府遺跡調査概報』第71冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996

注13　石井清司氏は、前掲注11文献において、中期から後期にかけて、甕のヘラケズリの施文範囲が変化することを指摘している。

注14　前掲注６ａ文献参照。

注15　時間列の概念については、以下の文献を参考にした。南　久和「月影式土器少考(その２)」(『金沢市額新町遺跡』　金沢市埋蔵文化財センター)　1989

注16　ここでの「形式」は、寺沢薫氏の示した第３次的形式分類(文献ａ)による形式であり、論者によっては、「型式」とされるものである。形式分類の方法については、奈良県六条山遺跡報告(1980年)・同矢部遺跡報告(1986年)以来、寺沢氏が明らかにしている様式論(文献ｂ)に基づく分類方法が、型式の時間性に最も厳密に対応し、妥当性をもって整理されていると考えることから、氏の分類方法に従っている。

ａ．寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡』　橿原考古学研究所)　1986

ｂ．寺沢薫「様式と編年のありかた」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社)　1989

注17　玉井功・伊藤暁子『巨摩・瓜生堂遺跡』((財)大阪文化財センター)　1982

注18　前掲注8文献参照。

注19　奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿原始編』 1993

注20　前掲注5文献参照。

注21　瀬戸谷浩・松井敬代他『上鉢山・東山墳墓群』(豊岡市文化財調査報告書第26集　豊岡市教育委員会)　1992

注22　軸芯を使用した場合、脚成形後の抜き取りが困難となることから、B類では軸芯と器体との接着面を最小限にとどめるために、軸芯の先端部に細い棒状ないしは釘状の突起を付し、この点で軸芯と器体とを結合させることによって安定を得た可能性がある。こうした工夫によって、軸芯の抜き取りの際、回転運動を加えやすくなり、抜き取りを容易にしたであろう。

注23　竹管状の工具痕を残す絞り工具を使用したとみられる例は、京都府園部町今林遺跡などでも確認している。野々口陽子(高野陽子)編「今林2号墳・今林遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第68冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996

注24　刺突痕を認める在地系高坏の中で、最も新しいものは、弥栄町大田4号墳下層土坑1の擬凹線文を施す有段口縁高坏であり、後期Ⅳ期の新相まで確実に残存する。

注25　山陰系高坏の刺突痕については、最終段階に坏部中央に充填する円形粘土板の大きさをあらかじめ決めるため、粘土板に中心を定めたものとする説がある(松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第8集　1991)。こうした刺突痕をもつ古墳時代前期前半の山陰系高坏の分布と意義について、考古学研究会100回記念シンポジウム(1999)で、次山　淳氏による検討がなされている。

注26　佐原真「弥生土器の製作技術」(『紫雲出』　香川県詫間町文化財保護委員会)　1964

注27　資料1の評価については、高坏Aの形態や、甕の内面ヘラケズリが頸部にまで及ぶことを考慮して、後期最古段階とした。しかしながら、後期初頭を凹線文を施す中部瀬戸内系甕の顕在化を重視する立場に立てば、中期末との過渡的な様相を示すものに他ならず、今後の資料の増加を待ち、再検討することにしたい。

注28　資料6段階は、7段階と高坏に明瞭な型式差があり、将来的には資料6段階と資料5段階と併存する形で分離できる可能性がある。

注29　北陸・山陰などの日本海側の各地域の土器の併行関係については、すでに明らかにしている通りである。前掲注6ａ文献参照。